

# 豊後森久留島藩と佐伯毛利藩との養子縁組考

別府大学講師

梅

木

幸

吉

(別府市東荘園町)

佐伯文庫について調査研究中、佐伯毛利藩第五代藩主毛利高久、並びに第六代藩主毛利高慶の両人は、いずれも森久留島藩第三代藩主久留島通清の三男及び五男の兄弟で、最初三男の靱負（高久）が毛利家と養子縁組をして入婿、第五代藩主となったが、高久に男子が無かったので、更に高久の弟助十郎（高慶）を順養子として迎えその人物が毛利藩第六代藩主毛利高慶であることを知ったのであるが、毛利藩の佐伯藩と久留島藩の森藩では距離的にも遠く、交通も不便な当時に在っては往き来にも何かと困難も多かったであろうと思われるのに、如何なる縁故で二代も続いて養子縁組をしたのかは如何にも不審に思われる所であった。

毛利藩初代の毛利高政は佐伯に移封される以前、日田珍珠六万石を領有していたが、其の頃久留島侯はまだ瀬

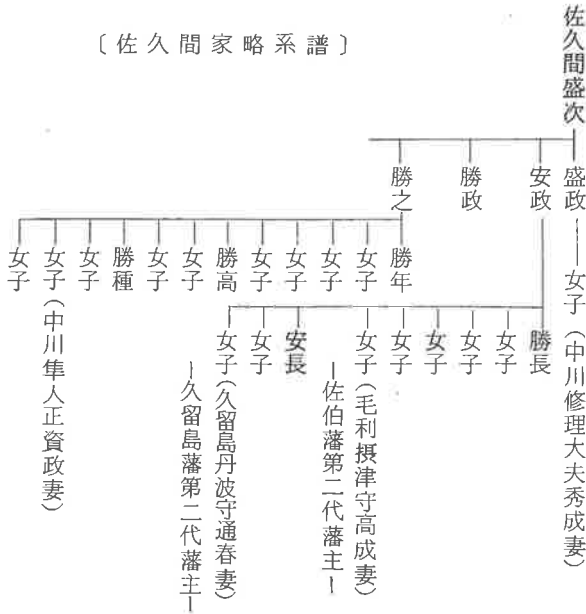
戸内水軍の雄として活躍していたから、両家の間にはなら拘わりは無かったと判断される。では徳川幕府になって江戸へ参勤交代で上った場合、登城の折は両藩いずれも外様でしかも小禄大名の為、「柳の間」を控室として居た関係で昵懇になったのであろうか、然し形式を重んずる大名が下々の者のように、養子縁組など話題にしたであろうか、これも甚だ根拠が弱いようで肯づけなかつた。

そこで豊後森まで出向いて郷土史研究家に何人か聞いてみたが要領を得なかつた。

ところが先頃九重町の甲斐素純氏の「豊後森藩政史についての一考察」という論文中、「二神文書」のことを説明した文中に、毛利久留島両藩の縁組を説明する鍵のあることを探り得た。

「二神文書」は大分市府内町林四郎氏所蔵のもので、二神家に長く伝わる古文書・古記録等で、その古文書解説中たまたま佐久間家系譜の抜粋があった。それによると、

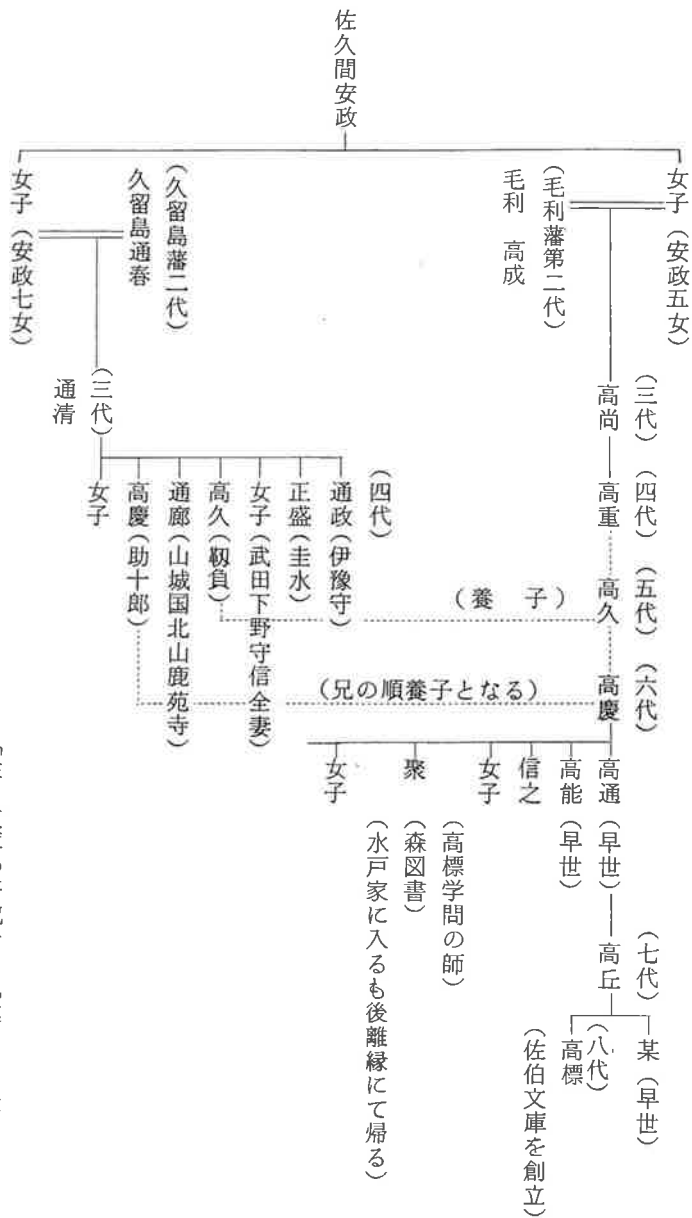
(註)盛政は玄蕃允とも称し、柴田勝家に属したが、天正十一年京都に於いて誅に伏す



佐久間盛次には四人の男の子があり、長男盛政は柴田勝家に属し賤ヶ嶽の合戦には大いに勇名を轟かせた武将であるが、天正十一年京都に於いて誅に伏し家名断絶している。

次男佐久間安政は二男七女の子福者で、その第五女(名前未詳)は佐伯藩第二代藩主毛利高成の正室として迎えられている。又第七女(名前未詳)は森藩第二代藩主久留島通春の正室となっている。これで毛利高成と久留島通春は佐久間家を絆として義兄弟として契を結び、両家の親戚関係が始められたのであろう。そこで両家の縁組事情も解明されるが、更に委しく明示すれば次頁の通りである。

毛利高成は佐伯藩第六代藩主となった後、久留島侯の氏神である若宮八幡宮(玖珠郡玖珠町大字森字郷町鎮座)及び善神王神社(玖珠郡大字森字片平田鎮座)へ石の大鳥居をそれぞれ一基ずつ奉献、豊後森在任の若き日に祈念したことへの成就を喜び、神徳に對し感謝の誠意を捧げているが、其の鳥居は今もなお参道に高く、仰ぎ見る人々に昔時を物語っている。



「佐伯文庫の研究」に記述すべき事項であったが、不明であったのでそのままにしていたが、先頃解明したので、追録の意味で「佐伯史談」に掲載していただけたらと。。。。。